

「そこに、山が」

—初稿—

2026/6/10

〈人物表〉

穂波 由紀 ほなみ ゆき

(65・35)

夫・毅を亡くしたばかり

穂波 嵩 ほなみ たかし

(40・10)

由紀の息子。穂波家の一人息子

穂波 毅 ほなみ たけし

(40)

亡き由紀の夫

亡くなった夫が毎年登っていた山に息子・嵩と二人で登ることにした由紀は、ロープウェイを使わず登ろうと息子に無茶を言うも途中で足を挫いてしまい、嵩が代わりに荷物を持ってくれたことで、昔三人で登った時のことを思い出す。

1.

穂波家・リビング（朝）

リビングの一角には、仏壇。線香が二本。

登山ウェアの穂波由紀（65）、手を合わせている。

仏壇には白木の位牌と写真立て。

山道で笑う夫・毅の写真。

嵩の声「母さん、準備できた？」

振り向くと、同じく登山ウェアの息子・嵩（40）。

由紀「うん」

と、仏壇に置かれた登山用の熊鈴を手取る。

リュックにつけ、

由紀「行こっか」

2.

バス車内（朝）

「苔石山登山口行き」のバス。登山客ばかり。
こけいしやま

車窓から、雲ひとつない青空の下に広がる田園風景と、その奥に苔石山が見える。

座席に座る二人。

由紀「まさか三十年ぶりに登るとはね」

嵩「俺も。三人で登ったきりだよ」

由紀「それでよく誘ったこと」

嵩「母さん元気なさそうだったし、ショック療法ってこと」

由紀「ありがと。もう大丈夫だから」

由紀、茶化して、

由紀「嵩こそ大丈夫？ あん時、途中で大泣きしてたけど」

嵩「え、そうだったけ？」

由紀「もう登りたくないって駄々こねてさ」

嵩、何やら考えて、

嵩「父さんって、そういう時どうしてたの？」

由紀「どうって？」

嵩「厳しい人だからさ、最後まで登れって言うの？」

由紀「……どうだったっけかなあ」

嵩「俺も大翔（ひろと）が疲れてぐずった時、どうすっか迷うんだよなあ」

由紀 「なるほどね」

由紀の熊鈴、バスに揺られカラカラ静かに鳴る。

3.

苔石山登山口（朝）

苔石山の麓。登山客がちらほら。

二人、舗装された坂道を登る。

坂の上には、すぐ近くにロープウェイの駅。

山頂方向からロープウェイが降りてきている。

嵩 「一本早い乗っちゃおうか」

と、ロープウェイ券売機の列に並ぶ。

由紀、立ち止まって、

由紀 「……あのさ」

嵩 「？」

由紀 「乗らないで登ってみない？」

嵩、驚いて、

嵩 「……マジで言ってる？」

由紀 「だって、お父さんの代わりに来たわけでしょ？」

嵩 「うん」

由紀 「お父さんならさ、乗らないかなって」

嵩 「まあ、そうだろうけど」

由紀 「ごめん、急か」

嵩、やれやれと列を外れる。

嵩 「どうせこれも、七号目までしか行かないからな」

4.

登山道（朝）

舗装された急勾配な坂道。

由紀、トレッキングポール片手に登る。

嵩 「本当に大丈夫ー!？」

少し後ろで嵩、心配そうに由紀を見上げる。

由紀 「大丈夫！」

5.

登山道（朝）

木の板の階段道。

由紀、一段ずつ肩で息をしながら登る。

6. 登山道・祠の前（朝）

登山道にある小さな祠。

二人、説明の立札を読んでは、賽銭を投げ入れて手を合わせる。

7. 登山道・五号目あたり（昼）

木々に覆われた薄暗い斜面。

由紀、木漏れ日の中を懸命に進む。

由紀 「……もう五号目超えた？」

嵩、スマホのアプリを見て、

嵩 「……まだ」

由紀、苦笑いして肩を落とす。

と、少し開けた場所に出る。

由紀 「うわ」

木々の間から、麓の風景が覗いている。

嵩 「あれ、駅」

と、麓のロープウェイ駅を指す。

豆粒のように小さい。

由紀 「結構、来たね」

由紀、駅を見下ろし、目を丸くする。

と、麓の駅からロープウェイがやってくる。

あつという間に二人の頭上を過ぎていく。

二人、顔を見合わせ、苦笑い。

嵩 「父さん、よく歩いて登ってたよな」

由紀 「毎年ね」

嵩 「何がモチベーションだったわけ？」

由紀 「あれでしょ。あれ」

嵩 「何？」

由紀 「そこに山があるからのな」

嵩 「まあ、そういうタイプか」

由紀 「今も、目の前にあるんだけどね。山」

嵩 「あるにはあるけどね」

由紀、ペットボトルを取り出し、水分補給。

8.

登山道・七号目前（昼）

嵩、塩飴を取り出し、由紀に差し出す。
嵩 「どうする？ まだ引き返すの間に合うけど」
由紀 「……なんのこれしき」
由紀、ペットボトルを飲み干し、進む。
嵩、苦笑いで着いていく。

山肌が剥き出しの斜面。

木の根や岩を選んでは、一歩ずつ一歩ずつ慎重に足を掛けて進んでいく。

斜面を転がり落ちる小石や土砂。

二人、額にはびっしょり汗。

由紀、右足を置いた岩がグラつき、体勢を崩す。

嵩 「母さん、大丈夫！？」

由紀、バランスを取ろうと咄嗟に右足を付くも、

由紀 「ありゃ」

足首を大きく内側に捻ってしまう。

嵩、息を呑む。

由紀、苦しい顔でその場にしゃがみ込む。

9.

登山道・七号目前（昼）

由紀、ベンチ代わりの切り株に腰を下ろす。

由紀 「……いててて」

靴下を脱ぐと、右足首に青い腫れ。

嵩 「やっちゃったね」

由紀 「いやー、申し訳ない。自業自得だ」

嵩 「大丈夫大丈夫」

嵩、手際よくテーピングを巻いていく。

嵩 「歩ける？」

由紀 「……ゆっくりなら？」

嵩、どうしたものかという顔。

ふと、上を見上げ、

嵩 「あそこか」

視線の先には、ロープウェイの駅。

嵩 「ちょっと、貸して」

と、由紀のリュックを預かり、体の前にかける。
嵩 「これなら行けそう？」

由紀、嵩を見てハッとする。
嵩 「一回立ってみて？」

由紀、呆然としている。
嵩 「母さん？ 大丈夫？」

由紀 「あ、うん」

由紀、ゆっくり静かに立ち上がり、足踏み。
由紀 「うん、行けそう」

嵩 「よかった」
嵩、リュックの熊鈴に気づいて、
嵩 「母さん、これダメだよ」

と、吹き出す。
由紀 「え？」

嵩 「これ、ロック掛かってるから」
と、ロックを外して熊鈴を振る。
カランカランと鳴る。

嵩 「ほら」

由紀、苦笑い。

嵩 「出なかったからいいけど」
由紀 「なんで知ってんの？」

嵩 「……なんか、知ってんだよ」
由紀、満足げに笑って、

由紀 「……行こっか」
由紀、ポールで右足を庇いつつ、そろりそろり進む。
嵩、その後に続く。
熊鈴の音がカランカランと響く。

10. ロープウェイの駅（昼）

「苔石山七号目駅」の立札。

11. ロープウェイ車内（昼）

車窓からは山の景色が一望。

由紀、その風景をスマホで撮影。

嵩の声「ロープウェイだって悪くないでしょ？」

二人、並んで座っている。

由紀「悪かったってば」

嵩「冗談だから」

と、苦笑い。

由紀「でも、頂上はもっとすごいのかな」

嵩「流石に覚えてない？」

由紀「……あん時もさ、上まで登ってないんだよ」

嵩「え？」

由紀「さっき思い出したの。今日と全部一緒」

12.

（回想）登山道・七号目前（昼）

先ほどの七号目前の登山道を登る、三十年前の夫・

毅（40）と由紀（35）。

後ろで嵩（10）、今にも泣き出しそうな顔。リュックに付いた熊鈴、カランカランと鳴っている。

嵩の声「全部一緒？」

由紀の声「嵩が七号目前で大泣きしてさ」

嵩「……疲れた」

子供の嵩、大泣き。

嵩「歩けない！ もう帰りたい！」

と、駄々をこねる。

由紀、困って毅を見る。

毅、すぐさま嵩のリュックを預かって、

毅「じゃあ帰ろうか。ロープウェイまで頑張れる？」

と、嵩の肩を掴んで、毅然と話す。

由紀、呆気にとられる。

嵩、驚いて泣き止んでは、頷く。

由紀の声「そんな時さ、お父さん急に優しくて。嵩の荷物持ってたげたり、ずっと励ましてあげたりさ」

毅「ほらもうちょっとだぞー」

と、嵩に声をかける。

嵩の声「マジか」

13. ロープウェイ車内（昼）

由紀 「後から聞いたたら、登山中に歩けなくなった奴が出たら、

そうしなければいけないって決まってるんだとさ」

嵩 「なんじゃそりゃ」

と、吹き出す。

由紀 「ほんとだよ。厳しいんだか優しいんだか」

嵩 「じゃあ、俺も母さんも、まだ登ってなかったんだ」

由紀 「うん」

と、苦笑い。

嵩 「父さんの代わりは、また来年か」

由紀 「だね」

二人、窓の景色を見下ろす。

14. 穂波家・リビング（朝）

仏壇。線香が一本。

写真立ての、山道で笑う毅の写真。

その横には、ロープウェイで撮った嵩と由紀の写真

と、熊鈴。

由紀、カランカランと熊鈴を鳴らし、手を合わせる。

少し、笑みが溢れる。

（おわり）